

## ●SDGs 関連の取り組みについて

団員 松本 久美子

初めに

この度の令和5年度松山市議会議員海外都市行政視察で本市と姉妹都市を結んでいるアメリカ・カリフォルニア州サクラメント市を訪問させていただきました。その際に、SDGs（持続可能な開発目標）に関してゴールデン1センター（多目的アリーナ）を視察いたしました。

サクラメント市は人口約46万人で、ゴールデン1センターはサクラメント市の中央部に2014年に着工し2016年にオープンしました。広さは200万平方フィートで、観客は17,500人を収容することができます。また、ゴールデン1センターは、世界で最もスマートなスポーツアリーナとされています。



(ゴールデン1センター)

SDGsには持続可能な社会の実現を目指して国連が採択した17の目標がありますが、多目的アリーナとして使われているゴールデン1センターが、どのような点がSDGsと関連づいているのかを調査し本市のSDGsの取り組みに対して参考となる事項について考察いたします。

調査・考察

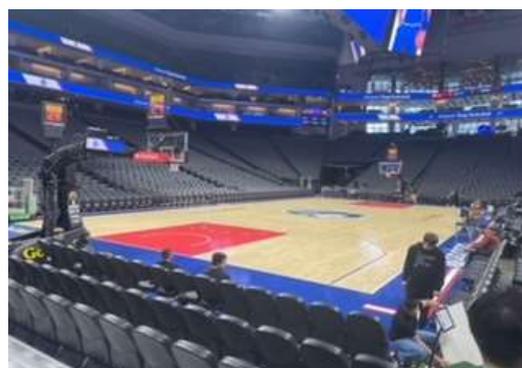
持続可能な開発目標(SDGs)とは、貧困、不平等、格差、気候変動による影響など、世界の様々な問題を根本的に解決し、すべての人たちにとってより良い世界を作るための世界共通の17の目標が設定されています。

ゴールデン1センターは、サクラメント市と企業によるオーナーシップカンパニーで運営されています。NBAのプロバスケットチームの地元チームのサクラメント・キングスのホームスタジアムとして使用されています。

NBA（National Basketball Association）とは、アメリカ合衆国を中心に展開されるプロバスケットボールリーグで30チームからなるリーグです。NBAは世界中で非常に人気のあるスポーツリーグでスリーポイントシュートやスラムダンクといったスペクタクルなプレーが特徴的であり多くのファンを魅了しています。

更にプロバスケットボールリーグ以外の様々なスポーツイベントやコンサート、ディズニーアイスショーなどのエンターテインメントイベントも開催されています。

設備には、バスケットボールコート、スイートルーム、レストラン、ショップなどがあり、年間の稼働状況は、利用可能日の244日のうち200日をオープンしており稼働率83%とかなり高いことがわかりました。また、利用者の50%は有料制の会員で有ることやシーズンチケット



（バスケットボールコート）

ト制により観客席は常に100%埋まっていると言います。

これらのことからゴールデン1センターは、イベントや試合等の開催により地域経済の活性化を促しています。更に経済成長や雇用創出に関連する目標に貢献して地域経済の発展に寄与しているとされています。これはSDGsの目標「8. 働きがいも経済成長も実現する」「17. グローバルパートナーシップを強化して目標達成を支援する」に関連付けられています。

また、さまざまなスポーツやエンターテインメントイベントを開催しており、

地域の多様な人々が参加できる場を提供していることからSDGsの目標に関連した社会的包摂、平等、人権の促進などに関連する社会的インクルージョンの活動が行われています。これはSDGsの目標「16. 平和と公正をすべての人に確保する」に関連付いていると考えます。



(モニタールーム)

次に、中枢部にはデータセンターやモニタールームなど高度なテクノロジーを備えています。それによりチケットや商品の売り上げ管理やカメラによる監視により地域に安全な環境を提供しています。

また、65キロメートル離れた遠隔地から太陽光発電システムにより発電された電力を一年中100%使用していることや節水システムの導入やアリーナの窓を開放して外気を入れることができる構造やここで販売している食べ物は半径150マイル以内で作られた食材を使用するなど、エネルギー効率を重視した設計やエネルギー管理システムを導入しています。これらは、SDGsの目標「7. エネルギーをみんなに提供しクリーンなエネルギー転換を推進する」「13. 気候変動に具体的な対策を取る」に関連付けられています。

これにより、エネルギー消費の削減や再生可能エネルギーの活用といったSDGsのクリーンエネルギー目標に貢献していると考えます。

#### 結語

ゴールデン1センターの視察により少なからずSDGsの目標社会のCO2削減に貢献する活動の推進とクリーンなエネルギー転換の推進に寄与していることが分かりました。これらは持続可能な開発を推進するための一環としてSDGsとの関連性があると考えます。規模の違いはありますが今回の視察の知

見を本市のSDGsの推進に役立てて行く所存です。見学に際し丁寧な説明をして頂きましたMr. Eric Eingに心から感謝申し上げます。